2008年8月10日　第31号

JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：日本手の外科学会

広報委員会

第51回日本手の外科学会学術集会を振り返って

第51回日本手の外科学会学術集会
会長　落　合　直　之

目　次

● 第51回学術集会を振り返って
● 理事長の任を終えて
● 新名誉会員のご挨拶
● 新特別会員のご挨拶
● 新 Corresponding Member の紹介
● 新評議員自己紹介
● 追悼記　二見俊郎名誉会員
● JSSH-HKSSH Traveling Fellow 報告記
● ハンドギャラリー（児島コレクション）
● 日本手の外科学会の新たな方向を目指して
● 専門医試験・特例申請の予定
● お知らせ　＝学会案内＝
● 編集後記

平成20年4月17日，18日の両日，つくば国際会議場（エポカル）で開催いたしました第51回日本手の外科学会学術集会は無事盛会裡に終えることができました．会員諸氏，中村理事長はじめ理事の方々，その他大勢のお力添えの賜であり，衷心より御礼申し上げます．「次の一手・夢を語ろうつくばにて」をスローガンとした学術集会への参加者は，1350名を超え，一般演題応募数は503題と過去最多でした．厳正な査読ならびにプログラム構成の都合上多くの優秀な演題を採用できませんでした．3題はシンポジウムとパネルに回し最終的な一般演題は370題，採用率は74.1％でした．演者指名の4つのシンポジウムに24題，2つのパネルディスカッションに14題，特別講演に4題という構成となりました．

今回は，学会の動向を多くの会員が共通認識できるよう4つのシンポジウム，2つのパネルと特別講演はメインの2会場に配置いたしました．一方，一般演題は全員口演とし，決められた時間帯に一斉に行う代わりに，いつでもアクセス可能な e-poster と従来のポスターを全員にお願いいたしました．その分発表者にはご負担になったと思いますがご協力に感謝いたします．結果は，主催者の目論見通り，どの会場も満員となり，大変活気に満ちた学会になったと自画自賛しております．恐らく，演者の方々も気合いが入ったのではないかと推察いたします．また，e-poster と従来のポスター展示で予習後一般演題の発表が聞けたので大変よかったとの感想もいただけました．ただ，PC で館内どこでもアクセス可能にする計画はダウンロード防止のプロテクターが必ずしも万全でないとの理由でできなかったことが残念でした．一方，e-poster の画面をデジカメで収録している会員も目に付きましたことは誠に遺憾なことであり，図らずも将来の IT を駆使した学会運営でのモラルハザードを考える機会となりました．

特別講演は，KN. An 先生に「Biomechanics of Tendon in Hand Surgery」，LB. Dahlin 先生に「Basic Research of the Peripheral Nerve especially on the Biology of Nerve Injury and Repair」，PC. Amadio 先生に「Carpal Tunnel Syndrome: From Basic Science to Clinical Aspects」，SH. Kozin 先生に「Reconstructive Operations in Brachial Plexus Birth Palsy」の講演をしていただきいずれも大勢の方が熱心に聞いておられました．

2日間計8つのランチョンセミナーも大変好評で一部立ち見席の方々がおられた由，主催者として不手際をお詫びいたします．

シンポジウムは，「絞扼性神経障害の病態生理」，義肢開発の現状を認識できるよう「Intelligent義肢の開発」，また，「手関節障害の治療の工夫」，今回の学会のスローガンでもある将来の夢を語る「夢を語ろう　～手の外科領域の現状と未来」としました．会員それぞれのお立場から色々感想をお聞かせいただきました．

パネルディスカッションは，「どう治療する　特発性手根管症候群」，「橈骨遠位端骨折の治療　ガイドライン作成に向けて」の2つで，前者では，本学術集会のオンライン一般演題登録を利用しアンケート調査をしました．お陰で特発性手根管症候群治療の本邦の現状を知る大変貴重な資料ができました．改めて会員の皆様のご協力に感謝いたします．

当日は休憩時間につくば自慢のパンの街のサービスをさせていただきましたところ大好評で2日目は瞬く間になくなりました．また働くヒトの手を長年撮ってこられた中竹孝行氏の写真展を併設し，会員の方の出品と合わせ，中々ユニークな雰囲気を醸し出した学術集会ができたのではないかと考えます．

来年は，堀内行雄会長のもとに第52回日本手の外科学会が平成21年4月16日と17日に東京新宿京王プラザホテルで開催されます．素晴らしい大会となることを祈念いたします．

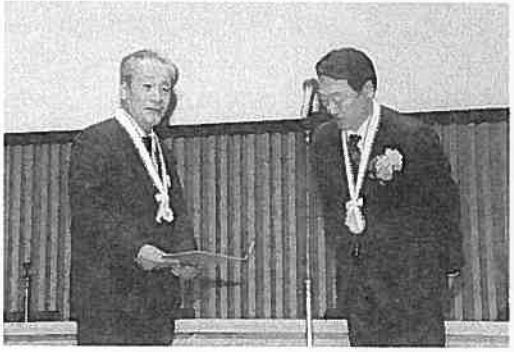
閉会式にて，次期会長への会長メダルとMilfordのハンマーの伝達式

理事長の任務を終えて ―新名誉会員として―

前理事長　中　村　蓼　吾
（中日病院　名古屋手の外科センター長）

本年４月まで４年間，皆様のご推挙により理事長を努めさせていただきました．専門医制度の創設，施行をはじめ50周年記念行事，米国手の外科学会のfirst guest societyなど多くの課題と取り組むことができました．在任中，会員の諸先生，役員理事の諸先生，各種委員会委員の諸先生には自己犠牲を省みずご協力，ご尽力をいただき，学会の前進ができましたこと深く感謝する次第です．

また，つくば市での第51回日本手の外科学会（落合直之会長）における総会で，名誉会員に推挙いただきました．伝統と活発な学会活動を続ける日本手の外科学会の名誉会員にご推挙いただき会員の皆様に厚く御礼申し上げます．



つくばでの第51回学術集会，理事長として最後の仕事

そもそも学会というものに初めて参加したのが，1968年，津下健哉先生が広島で開催された第11回日本手の外科学会学術集会でした．このように手の外科学会には医師になった当初より関わりがあり，その名誉会員にしていただけて大変嬉しく思っています．

初回出席から早や40年ですが，自分の生きてきた時代のこととてそんなに昔のことども思えません．学術以外の印象深い出来事には盛岡での第18回学会（猪狩　忠会長）の時の交通ストライキが語りぐさです．私はストライキ開始前最後の列車で盛岡に着くことができましたが，帰る列車はなく，岩手医科大学の教室挙げての手配のバスで東京まで戻りました．75春闘統一ストライキの際のことで思い出が多い先生が見えると思います．奮闘された岩手医大の皆様に敬意を捧げます．また，第48回学術集会（土井一輝会長）の時は地震があり交通が乱れました．評議員会の開催を遅らせて対応しました．また奇談としては教育研修会の講師に講演料がないばかりか，参加費を請求されたことがありました．

手の外科の勉強は三浦隆行先生について始めました．前田敬三，木野義武両先生のよき指導とともに三人の先生には本当にお世話になりました．新潟大学田島達也先生の新潟手の外科講習会や奈良県立医科大学で玉井　進先生の下で行ったマイクロサージャリーの研修でも随分お世話になりご指導をいただき感謝しております．大学の壁を越えて勉強できたことがずいぶん役立ちました．壁を越えた研修，研究が現在の日本手の外科学会の発展の礎になっていると信じています．

21世紀に入り，より社会の要請に応えられる形での医学，医療のあり方が問われております．手の外科という特定分野ですが，国民の日常の生活，生産力ある仕事，趣味を支える手，上肢の障害に対する医療要求は高齢化社会の中でも高まってきています．あらゆる機会を捕らえて，手の外科医が提供できる医療内容を伝えて行くことが大切と考えています．

現在は幸にも名古屋市の中心部にあるマスコミ系の中日病院に名古屋手の外科センターを開設して現役を続けています．今でも未だ手習いをする気持ちを捨てないよう努力しておりますが，まだまだ反省が多い日々です．

日本手の外科学会関連では2010年秋ソウルでの国際手の外科学会終了後に開く，Postcongressと併催する第５回日米手の外科会議と取り組んでいます．交通の便などより東京で開催する方向にあり，京王プラザホテルが会場候補です．もっと安くてよい会場があるとよいのですが．単に国際手の外科学会の延長戦のような学会ではいけないと考え，特色を出すようにしたいと考えています．国際交流が中心の国際手の外科学会と異なり，東京では白熱した議論ができるよう配慮したいと考えています．日本手の外科学会の皆様が多数の参加していただき日頃の成果を国際的に拡げ，知ってもらえるよい機会でもあります．引き続きのご支援をお願いする次第です．

新名誉会員のご挨拶

名誉会員に推されて

㈶新潟手の外科研究所
吉　津　孝　衛

他人事だと思っていた65歳の定年を迎え，日本手の外科学会評議員から退くことになりました．第51回学術集会の通常総会で名誉会員に推薦され，名誉会員証を戴き，お礼の言葉を一言述べさせていただきました．無事終了したことに感謝いたします．ホッとしながら周りを見渡すと，何かあるといつも一緒のテーブルで食事をしていた薄井，伊藤両新特別会員のお顔がみえ，互いに最後まで手の外科という同じレールを走ってこられて良かったなあと安心いたしました．またフィラデルフィアのHunter先生を訪問した際に，そこに留学中だったのが新婚間もない落合先生で，夕食に誘っていただきました．その先生が会長として開催される学術集会で，私が１つの幕引きを迎えたことも，何かの因縁があることと，互いに顔を見合わせ乾杯させていただきました．

約40年間，日本手の外科学会員として胸を張って仕事をさせていただき，多くの仕事とその成果を発表させていただきました．さらに“手の外科”を通して，大勢のすばらしい先生方にめぐり合うことができ，さらに“一生の仕事”を通じて色々の事を教えていただきました．改めて御礼を申し上げます．特に田島達也先生という大きな傘の下で仕事をすることが出来ましたことは“一生の宝”であり，現在を生かさせていただいておると考えております．

私の手の外科への第一歩となったのは，鶴岡市時代の諸橋政樹先生のあの有名な“primary reconstruction”の，多くの症例の手術助手をしたことからです．一般整形の手術終了後の夜になってから，“趣味の手術”と言われながらも，真夜中まで手術に付き合っていたことが懐かしく思い出されます．医学紛争のため，ようやく大学へ戻れたのが昭和45年でした．いつの間にか“手の外科班”に組み込まれており，最初に始めたのが人工腱に関連した実験でした．発表が昭和48年の九州大学西尾篤人教授の開催による第16回学術集会でした．しかしこの会で驚嘆したのがmicrosurgeryの発表で，これはすごいと思い，直ちに門をたたいたのが奈良医大の玉井　進先生のところでした．これがその後の“手の外科”の考え方を一変させたmicrosurgeryとの出会いでした．この技術が大きな福音となったことは，日本手の外科学会員の皆様のよくご存知のところです．その後神経，腱といくつかの大きな波があり，平成14年には多くの会員の皆様のご後援で，第45回学術集会を開催させていただきました．私自身ある意味では最もすばらしい時期に漂っていたのではないかと思っております．

さて現在，長い間の懸案であった“手の外科専門医制度”が発足しました．これは多くの問題を抱えたままだとしても，これからの流れと考えます．私自身は運の良いことに昭和60年に財団法人新潟手の外科研究所を立ち上げることができ，今年で23年になります．その定款の一部に“専門医の育成”があります．「新潟手の外科セミナー」「新潟手のリハビリテーション研修会」「研修医養成」「マイクロサージャリー技術講習」等を行ってきました．これらの内容は手術件数，その内容をふまえ，日手会の基幹研修施設として認定されました．非常に嬉しいことです．現在，５人の手の外科専門医が専従しておりますので，今後さらに皆様のお役に立てるものと考えます．私自身は65歳を定年として，役職を退きましたので，少し楽になりました．

今後も続けられる限りスタッフの邪魔にならないよう，手の外科医として研究所の仕事を助けると同時に一線で働きたいと思います．長い間日本手の外科学会員として無事に過ごさせていただき，改めて会員の皆様にお礼を申し上げます．名誉会員としてこれからの“手の外科”を見守りたいと思うと共に益々の発展を心よりお祈り申し上げます．

……新特別会員のご挨拶……

私が特別会員？

慶友整形外科病院　院長
伊　藤　恵　康

今年１月，気がつけば65歳となり，伝統ある日本手の外科学会の特別会員に推挙していただき，大した貢献もできなかった私としては大変恐縮いたしております．ありがとうございました．

普通の職場では65歳の定年退職，後はゆっくり自分のペースで豊かな趣味に生きることができるのでしょう．自分としては55歳になったら原稿書きや学会活動を止め，もっと有意義な人間的な趣味に生きようと思っていました．それが60歳になったら…，65歳になったら…とだらだら延びてしまいました．仕事も月曜，土曜は休みのはずでしたが，手術や外来患者が多くて消化しきれないため，肘の靱帯損傷，離断性骨軟骨炎，胸郭出口症候群など，一人でできる手術はいつしか休みの月曜日に行うようになり，まだ懲りずにやっています．常勤医として14人の強力な整形外科医，２人の麻酔科指導医がフル回転で，押し寄せる患者さんを治療している我が慶友整形外科病院では，休み以外の時はスタッフの邪魔にならないよう，居眠りしながら助手をしています．

今年３月号の「整形外科“誌説”」に「医局制度と医療崩壊」と題して，私論を書きましたが，新しい臨床研修制度の結果，多くの大学で，マスコミや厚労省が悪の根源としていた医局制度が崩壊し，マスコミに躍らされた「患者様」の横暴も加わり，WHOで世界最高とランク付けされた我が国の医療制度が崩壊しつつあります．いままで他人事と思っていましたが，近隣の総合病院から医師たちが引き上げられ，しわ寄せが限界を超えて働いている我々の病院にも押し寄せて来つつあります．開業医，勤務医の区別なく社会に目を向けて声を上げる時期が来ていると思います．病院と医師，看護士，その他すべてのスタッフをしっかり守っていくことが，地域の医療崩壊を防ぐカギだと思います．

今までいろいろなことをやってきましたが，これから，一番長く携わってきた肘関節に関する本を書こうとしています．これまで書いて来たものをまとめるので独断的な内容になりそうですが，教科書的なものではなく，実際の手術適応，手術のコツなどを中心に書きたいと思っています．その前に書かなければならない原稿が２本あり，また日手会の教育研修会の準備もありますので，しばらくは人間らしい豊かな人生とは無縁な生活になりそうです．

最後に，日本手の外科学会の末長いご発展をお祈りいたします．

特別会員のご挨拶

東北海道病院　院長
薄　井　正　道

この度，日本手の外科学会の特別会員にご推挙いただきまして有り難うございます．

私は北大整形外科に入局してしばらくしてから，移植に興味を持つようになり，北大第一病理の研究生になりました．この間に，腫瘍にも興味を持つようになり1年9ヵ月の研修の後，昭和47年10月整形外科教室に戻りました．腫瘍は石井清一先生を中心とする同好会でした．石井先生は，米国のCarroll先生から手の外科を学んで帰られて間もなくでありました．新しい分野に対する興味もあり，腫瘍も勉強できると考え石井先生の上肢班に入れてもらうことにしました．しばらくの間，石井先生の指示で，ポリクリ，上肢班のデスカッッション，手術などにずっと石井先生に付き添いました．これは私にとって極めて有用で，間もなく手の外科というものの概略が理解できるようになりました．

手の外科の研修に明け暮れていた昭和48年の夏，北海道で再接着が必要な症例が2例ほど続いて発生しました．石井先生は，マイクロサージャリーの技術導入が必要であると考えられ，夏休みを利用して奈良医大の玉井　進先生のもとに勉強に行く人を募集しました．しかし，希望者が現れず，私にお鉢が回ってきました．その理由は，「君は病理で顕微鏡は見慣れているから良いだろう」という少し妙なものでしたが，1歳の長女と家内を実家に帰し，3週間奈良医大にお邪魔いたしました．初日に玉井先生から「血管は縫ったことがありますか？」と聞かれ，まったく何も知らないことを正直に告白しました．玉井先生は，直ちに犬の大腿動脈を縫って見せ，翌日から1週間は肉眼で，次の1週間は顕微鏡下で大腿動脈を縫合し，最後の1週間は顕微鏡下で0.5mmの血管まで縫合するようにとの指導を受けました．この教育法は非常に合理的で，全くの素人の私が，3週間後には何とか0.5mmの血管が縫えるようになり，北海道に戻りました．そして，再接着をはじめ，さまざまな自家組織移植を行うことになりました．

昭和52年夏，新潟大学の田島教授が，夏に行われていた手の外科セミナーを中止して，アメリカ東海岸の手の外科・マイクロサージャリーの主要な施設見学し，日本側から持参したペーパーを含めて合同討論するツアーを企画されました．私は，このツアーに参加させていただきましたが，初めての海外旅行でもあり，極めて強烈な印象が残りました．田島先生は早朝からわれわれに招集をかけ，英語の不得意な我々に対して，前日の討議内容を解説し，ご自身の意見を述べられました．私はこの旅行で「アメリカ手の外科」と「田島先生の手の外科」の一端を同時に学ぶことができたように思います．

昭和55年の夏から1年間，石井先生のご推挙で，ニューヨークのCarroll先生のもとで手の外科をじっくりと勉強させていただきました．月に1度はDick先生のマイクロの手術を手伝わせていただいたことも適度な刺激となって，あっという間に1年間が過ぎました．滞在中，ニューヨークで開催された国際再建マイクロのシンポジウムでは，玉井先生に中国のChen先生をはじめ有名な先生を紹介していただきました．

札幌医大の教授になられた石井先生のご厚意で，昭和59年から札幌医大で若手の先鋭と一緒に手の外科・マイクロサージャリーの仕事を継続・発展ができたことは，大変に有り難いことでした．平成11年，現在の東北海道病院に移ってからも，私の主な仕事は手の外科です．再接着は適応を厳選して行っております．最近，小指の完全切断を，3時間半で終了できました．最初の再接着が12時間かかりましたので，格段の進歩があったと思います．しかし，時間のかかる組織移植は荷が重く感じられる昨今です．

これまで私を育てていただいた石井清一，玉井　進，田島達也，R.E.Carrollの諸先生および日手会会員の皆様に心から深謝し，稿を終わります．

特別会員のご挨拶

整形外科 多田クリニック　院長
多　田　浩　一

伝統ある日本手の外科学会の特別会員にご推挙いただき誠に光栄に思います．

思い起こせば昭和47年新潟大学 田島教授の下に行われた第15回日本手の外科学会において，恩師江川常一先生の教えを受けながら「生体内での腱の活動性について」の演題を発表させていただいたのが私の日本手の外科学会のデビューでした．手術後の患者のフォローアップの仕方，文献の引き方，発表論文や抄録の書き方，英文抄録の書き方，さらにはスライドの作り方などすべてに先輩や恩師の指導を受けて，何日も徹夜をした事を思い出します．特にスライドはすべて手書きで写真の現像や焼きつけもすべて自分で行い，何回も何回もやり直しをしました．特に厳しい先輩の指導を受けると，発表前日の予行で訂正を命じられ，旅先で写真屋を見つけて急遽，写真撮影，スライド作成をした事もありました．この様にすべて手作りで発表するものですから，多くの労力と費用を要し，とても一人で何題も演題を発表することは不可能でした．学会の時の旅行や，先輩方との触れ合いも楽しい思い出になっています．特に新潟での第一回の発表の後には越後の湯沢温泉へ，当時の七川助教授を筆頭に阪大手の外科グループ約10名で一泊旅行をした事を覚えています．先輩達のお酒の飲み方，芸者という生きものを始めてみた事，医者としての生き方など色々教えられたことを鮮明に記憶しています．

それ以後は毎年の日本手の外科学会に演題を発表する事を目標に頑張ったものでした．

今回の原稿を書くに当たって過去の学会発表や論文発表を調べてみて自分の整形外科医としてのキャリアーを振り返ってみました．第15回日本手の外科学会から第26回日本手の外科学会まで連続12回の学会発表を行っています．その内容も先輩に指示された研究から徐々に自分で計画を立てて実行した内容に進化し，さらに口演発表を英文論文として発表する様になっています．それ以後は香川医科大学への転勤に伴い，スタイルは後輩への指導へと変わって行き，共同演者としての参加が多くなっています．

昭和55年には憧れであった日本手の外科学会の評議員に選んでいただき，また平成14年から４年間は理事として日本手の外科学会の運営に携わる機会をいただきました．委員会や理事会などで他大学の先生方と接する事は大変楽しく，自分達と違う物の考え方を教えていただき大変視野が広くなりました．最近の若い人達は十分にその事は判っている様で他施設の医師との交流は非常に盛んであり結構な事だと思います．

日本手の外科学会の評議員の停年（65歳）をきっかけに整形外科医として今後どのように生きていくかを考えました．勤務医として続けるには会議等の臨床以外の監理者としての仕事が多すぎ，マイペースで医師としての姿勢を貫くには開業医が良いと考えるに至りました．「何で今さら…」と先輩や後輩に言われながらちょうど65歳でクリニックを開きました．今まで勤務した大学や大病院とは全く違う視点で一人ひとりの患者さんと接するのは非常に楽しく刺激的です．ストレスも少なくゆっくりとした時間の流れの中で考える時間も多く楽しい開業医生活を送っています．

今後は後輩の手の外科医の活躍を楽しみにしながら，日本手の外科学会に貢献出来る方法を模索したいと思います．

新Corresponding Memberご紹介

Richard H. Gelberman, M.D.

Dr. Gelberman is the Fred C. Reynolds Professor and Chairman, Department of Orthopaedic Surgery at Washington University Medical School in St. Louis, Missouri. He completed his undergraduate education at the University of North Carolina and graduated from the University of Tennessee Medical School. He did his internship at University of Southern California, Los Angeles, his residency at University of Wisconsin, Madison, and was a fellow in hand and microvascular surgery at Duke University, and in pediatric orthopaedics at Harvard/Children's Hospital of Boston.

Dr. Gelberman has been an active member of many medical organizations including being Past President of the American Academy of Orthopaedic Surgeons and the Past-President of the American Society for Surgery of the Hand.

Dr. Gelberman is the recipient of numerous research awards and honors including the Kappa Delta Award for orthopaedic research in 1985; author of over 250 scientific articles, two books and 25 book chapters. He also serves on the editorial boards of eight medical publications and was elected to the Institute of Medicine of the National Academy of Sciences in 2003.

Dr. Gelberman is married to Sarah and has three children and four grandchildren. He enjoys golf, music, history, baseball, and spending time with his border terrier, Morris.

2007年9月ASSH会場にて.
Guest Societyのポスターの前でASSH会長Gelberman先生と
日手会中村夢吾理事長, ポスターを作成したお一人の柴田　実理事

新評議員紹介

秋田　鐘弼（あきた しょうすけ）　大阪南医療センター整形外科リウマチ科

私は，平成４年に富山大を卒業し，大阪大学整形外科学教室に入局いたしました．入局後は，土井照夫先生，多田浩一先生，露口雄一先生，河井秀夫先生，政田和洋先生ほか，阪大手の外科グループの先生方にご指導をいただき，整形外科および手の外科を勉強してまいりました．手の外科は，外傷，マイクロサージャリー，リウマチ，先天異常，腫瘍と幅広く臨床研究をおこなってきましたが，平成18年からは現在の施設にて主に関節リウマチ患者の上肢機能再建などの臨床研究および基礎研究に従事しています．

この度は日本手の外科学会の評議員に選出していただき，大変光栄に存じます．これを機に手の外科医を志した初心にもどり，より一層の努力をしてまいる所存です．まだまだ若輩者ではありますが，日本手の外科学会の発展のため，微力ながら尽力したいと考えております．今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします．

有野　浩司（ありの ひろし）　防衛医科大学校整形外科

昭和62年に慶應義塾大学を卒業し，矢部　裕教授の整形外科に入局しました．内西兼一郎先生，伊藤恵康先生，堀内行雄先生，高山真一郎先生の指導を受け，関連病院などに勤務し，石黒　隆先生の指導で学位を取得しました．平成９年から防衛医大整形外科に勤務し，根本孝一先生のもと手の外科を担当しています．平成12年から１年間スウェーデン王国のルンド大学手の外科に留学し，その後も防衛医大に勤務しています．

埼玉手の外科研究会の事務局を防衛医大が担当していますが，埼玉県には手の外科の大先輩の先生が数多くおられ，いつも勉強させていただいています．

手の障害，傷害に対して手術だけでなく保存的治療や後療法を大切にし，手の外科医だけでなく他の整形外科医や研修医，パラメディカルなどの理解，協力を得るようにできればと思っています．

微力ですが手の外科学会のために少しでもお役に立てればと思います．ご指導よろしくお願い申し上げます．

恵木　　丈（えぎ たけし）　大阪労災病院整形外科

この度は伝統ある日本手の外科学会の評議員に選出していただき，大変光栄に存じます．

私は平成５年に大阪市立大学医学部を卒業し，研修医時代に山野教授のマイクロ手術や，香月憲一先生，日高典昭先生の鮮やかな手術，アカデミックな雰囲気に接することで手の外科を志すようになりました．その後，安田匡孝先生に手関節疾患の奥深さをお教えいただき，特にその分野に興味を持ちました．平成10年には新潟手の外科研究所において吉津先生，牧先生，坪川先生の下で研修させていただき，手の外科の真髄を学びました．平成13年に大学助手となり高岡教授，香月助教授のご指導の下，人工指関節（Pro Design）の開発を行い，リウマチ手関節のMRI解析により学位を取得しました．

現在は大阪労災病院に勤務し，RAと手関節疾患を診療の主要ターゲットとしています．若輩者ですが本学会の発展に微力ながら寄与していく所存ですので，ご指導のほどよろしくお願い申し上げます．

千馬　誠悦（せんま せいえつ）　中通総合病院整形外科

手の外科不毛の地であった秋田から新評議員に選出していただき，大変光栄に思っております．私は，1984年に札幌医大を卒業し，秋田大学整形外科に入局しました．当時の教授の方針で専門分野に進まずに整形外科の分野全般を研修し，卒後6年を過ぎた頃に勤務していた上司のすすめもあり，手の外科を志しました．日本手の外科学会の入会は，1992年でした．秋田に出張していた現在の弘前大学藤教授の手術に感銘をうけ，その後は新潟手の外科研究所で田島先生，吉津先生と牧先生の下で研修をさせていただき，手の外科の基礎を築くことができました．今後は，得意分野を発展させていくこと，若手医師に手の外科を啓発して興味を持つ医師を一人でも多く増やすこと，地域の手の外科のレベルを向上させることを目指しております．さらに，微力ながら日本手の外科学会のお役に立てればと考えておりますので，ご指導，ご鞭撻のほどよろしくお願いします．

武石　明精（たけいし めいせい）　東京慈恵会医科大学形成外科

日本手の外科学会新評議員になりました東京慈恵会医科大学形成外科の武石明精です．手の外科は我々の教室の伝統であり，現在でも先天異常，外傷等多くの手の疾患を経験します．手の先天異常や外傷に対する皮弁学をはじめ，私の専門であるマイクロサージャリーを応用した重度外傷および悪性腫瘍切除後の再建に精進し，教室の経験を学問として発展させるべく努力いたします．さらには近年臨床研究を行っている手の腫瘍の分野でも，研鑽を重ね，日本手の外科学会の発展に貢献できるよう，努力する所存でございます．今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます．

田中　克己（たなか かつみ）　長崎大学形成外科

このたび歴史と伝統ある日本手の外科学会の評議員に選出していただきましたこと，身に余る光栄に存じております．

私は昭和59年に長崎大学を卒業後，ただちに当時の難波雄哉先生の主宰する形成外科に入局いたしました．その後，大学と関連施設で形成外科とともに手の外科の修練を行うことになりました．また，同時に梶　彰吾先生，村上隆一先生の下でマイクロサージャリーの基礎と臨床を学び，このことが私のライフワークとなっております．現在は手の先天異常，外傷・熱傷などの疾患を中心に診療を行っております．患者さん・ご家族と私どもの両方の満足が得られるような丁寧な医療を心掛けております．さらに医育機関に所属する者として，手の外科医の育成や学生に対する手の外科の教育なども行っているところです．

今後とも微力ではございますが，本学会発展のため精進してまいる所存です．更なるご指導ご鞭撻を宜しくお願い申しあげます．

帖佐　悦男（ちょうさ えつお）　宮崎大学医学部整形外科

宮崎大学医学部整形外科の帖佐でございます．前理事長中村蓼吾先生ならびに役員の方々の「地方でも手の外科専門医の育成」をというご高配により，今回日本手の外科学会の評議員にご推挙いただきありがとうございました．私は1984年に大分医科大学を卒業後，同年宮崎医科大学整形外科に入局しました．手の外科学会には1992年に入会し，新設大学でしたので私も手の外科を大学病院で担当させていただいておりました．大学病院での手の外科グループとしての診療は，1980年から開始されていましたが，手の外科のグループ長がほとんど開業されたため手の外科に関する業績や研究の継続性がありませんでした．今後は，診療のみでなく臨床研究を含めた基礎研究や手の外科を希望する若手医師の研修留学が実施できる環境整備に努めることで，地方における手の外科医の育成ならびに本学会の発展のため努力いたしますので，今後ともよろしくお願いいたします．

津村　　弘（つむら ひろし）　大分大学医学部整形外科学

昭和56年に九州大学を卒業後，一貫して関節外科学とバイオメカニクスに興味を持って仕事をしてきました．今では一般的な治療法となったキーンベック病に対する橈骨楔状骨切り術を昭和57年に日本手の外科学会で発表させていただきました．

私の身の回りの若い医師たちを見ていると，手の外科学の高度な専門性にたじろぎ，挑戦しようとするものが少なくなっているようです．また，一般の整形外科医は，手の外科の症例は専門医に送ればよいと避ける傾向さえ感じられます．一方で，橈骨遠位端骨折や絞扼性神経障害などの common disease の診療する機会は確実に増加しています．若い医師たちに，このような一般的な疾患の治療に手の外科学の高度な知識や技術が極めて有用であり必須であることを認識させることが重要と考えます．

このような点を踏まえて，地域での手の外科学の教育と本学会の発展のため，微力ながら努力したいと思っています．

平地　一彦（ひらち かずひこ）　市立札幌病院整形外科

日本手の外科学会評議員に選出していただき，身に余る光栄に存じます．私は平成２年に北海道大学医学部を卒業し，北大整形外科に入局しました．三浪明男先生，加藤博之先生から指導を受け，科学的で独創的な目を持つことを教わり，臨床の現場から生まれる発見や知見を学んできました．広島と新潟の手の外科講習会で研修し，５年目ではじめて本学会へ応募した抄録は不採用でした．本学会の厳しさを痛切しました．悔しい思いから以後14年連続して発表させていただいております．後骨間神経麻痺，オカルトガングリオンの疼痛機序，透析由来の手根管症候群，慢性手関節痛，手のコンパートメント症候群，超音波検査，血管柄付き肩甲骨移植などを研究して来ました．今後もひとつひとつの経験を大切にして，独創的で新しい知見を見出せるよう精進するつもりです．微力ながら本学会の発展に貢献できるよう努力いたしますので，何卒よろしくお願い申し上げます．

二見俊郎先生を偲ぶ

東海大学大磯病院整形外科
岡　　義　範

二見俊郎先生と生前最後にお会いしたのは，平成17年６月の事である．平成20年の日本手の外科学会会長に指名された事のお祝いを兼ねて二見ご夫妻を我が家にお招きし，私の家内共々夕食を伴にしながら楽しく有意義な一時を過ごしたのが最後になろうとは思ってもみなかった事である．当日，車から大きな箱をおろし，拙宅のやや長い階段を玄関内まで運んでくれ，見事なステンドグラス製の電気スタンドを手土産にいただいた．このスタンドを見るたびに二見先生を思い出し，悲しくも複雑な気持ちになるので，済まないが現在は２階の隅にしまい込んでしまっている．

５月20日に日手会事務局から彼の訃報が飛び込んだ．札幌の日整会直前の事で，会葬に参列も出来ず，翌週に家内と相模原の二見邸に伺った．ご自宅の居間に祭壇が作られ，骨壷の横に彼の写真が飾られていた．写真の容貌は誠に晴れやかで，洋服は赤橙色のシャツであり，昔から粋であった様相・容貌そのものの二見先生がそこにいた．霊前に座ると同時に涙が出て止まらず，暫く嗚咽してしまった．

二見俊郎君は九州・鹿児島の産である．私もやはり九州・大分の産で，生年月日は彼が昭和21年６月５日で私は前日の６月４日生れ，私が１日年長の同級生である．彼と初めて知り合ったのは昭和55年頃で，彼が北里大学で手の外科を専攻し頑張り始めていた頃，私も同じ神奈川県の東海大学に赴任し，神奈川県内での種々の研究会で意見を戦わせ始めた頃である．二見君の頭髪は当時もやや少なく私には老けて見えたが，彼も私の頭髪の多さと外見の若さから相当年下と見て，「岡君！」「君！」と呼ばれていた．相当年が経過した後，私の方が１日年長である事が判り，それから私への呼び方が変わった．「君！」から岡先生となり，「岡君」は同じであったが，挌下への語調から同輩のそれへと変化し，やっと対等の関係になれた．以後は同郷・同輩的な気持ちからも妙に気が合い，学問・それ以外のところでも行動を伴にする事も多くなった．

二見君は行動の人である．日本手の外科学会における彼の行動・発言は日手会員はよく知るところなので省くが，神奈川県内に於ける手の外科・肘関節外科の研究者間の知識・技術の交換を図り，臨床・研究の進歩・発展に寄与すべく，県内の大学を中心とした基幹病院に呼びかけ，神奈川手・肘の外科研究会を立ち上げた．これには私と聖マリアンナ医大の別府先生（現教授）を巻き込みながら，当時の各大学の主任教授の了解をとり，代表者の推薦をいただき，幹事会を構成した．平成７年に第１回研究会を開催し，彼が初代の会長を務め，以後，現在まで13回を経た研究会の基礎と体制の充実を図ってきた．神奈川県には日手会評議員が多いが，この会の影響も多大であると思っている．二見君の主義は「上肢外科」という範疇を作るところにあり，手・肘・肩の学会は別々に活動しているが，研究者は同一である事も多く，機能的に上肢全体から捉えた其々の部位であるとの観点を強くしていた．現今多くの整形外科研究班では「上肢班」として活動している所が多いが，彼の先見の明が偲ばれる．

二見君はテニスを愛していた．日手会終了時に手の外科医テニス大会が開かれているが，随分前からラケットを抱えて学会に参加していた．私も彼に遅れて同大会に参加するようになり，彼と試合で合いまみえる事度々であった．また，神奈川県内にある５大学整形外科のテニス大会も年１度開催され，お互いこれらに参加した．彼はお世辞にも上手とは言えなかったが，何事にも真剣に取り組む彼の性格から外目に見ても徐々に上手くなって行ったのが判ったが，試合では殆ど常に私の方が勝っていた．負けず嫌いの性格からか，それが嫌だったらしく，テニスの参加はいつしかなくなり，ゴルフへと興味が移っていった（と彼は私に言った）．ゴルフも時々ご一緒した．これも，ショットのフォロースルー時右膝が曲がり過ぎ，お世辞にも上手とは思えないフォームであったが，スコアーは殆ど私より良い成績で，気分が良いことも手伝ったのか，私的なゴルフを伴にする事がかなりあった．膝

痛を訴える事が多く，下り坂を後ろ向きに歩いていたのはつい先日の事の様に感じる．彼が師と仰ぐ山内裕雄先生の山内杯に奥様と伴に参加されていた時の二見君の晴れがましく・嬉しそうな振る舞いが目について残っている．彼は随分前に最初の奥様を亡くされた．その後２人のお嬢さんを父親１人で立派に育ててこられた．沖縄での日手会時，宴席を同じくする機会が有ったが，常にお嬢さん方の事を気にされ，当時私にはまだ無縁であった携帯電話で連絡をとっていた事を思い出す．しばらく独身を通された後，新しい伴侶にめぐり合われても良いのではと思い，僭越ながら候補者を紹介しようとした．結果は会って貰えるまでには至らなかったが，その後現在の奥様とめぐり合われ，大事な人生後半生を伴にし始めた姿を見て，家内共ども心底喜んだものであった．彼の渋谷の家に招かれ，お祝いの宴を持つことが出来たのもつい先日のことの様な気がする．

二見君は行動の人，情熱の人，粋の人であった．何事にも真剣に真摯に取り組んだ．わずか61年という短い人生を走り抜けていった．まだ多くの事を成したかったに違いない．誠に残念であったろうと思い侘びられる．彼の遺影の前で涙をこらえる事が出来なかった．そして彼に言った．「直ぐには近くに行かないし，また呼んでくれるなよ！」．　数10年後彼の地で再びまみえた時，また一緒に遊ぼうよ．あまり長くない人生だったが，君は立派に生きられた．ご苦労様でした．安らかにお眠り下さい．合掌．

東日本手の外科研究会晩餐会にて

神奈川５大学整形外科テニス大会の開会式にて

二見俊郎先生を偲んで

相模台病院整形外科
小　林　明　正

病魔は突然襲ってきた．二見先生とは院内の居室も隣同士で，毎日顔を合わせていたので，顔色をみれば体調の良し悪しは直ちにわかった．平成17年11月，二見先生の行動がどうもおかしいことに気づく．若い先生達も二見先生の普段と異なる様子を感じていた．当初は，診療担当副院長という職務が多忙なため疲労によるものかと考え，暫く行動を注視することにした．しかし，その後も異常が続くため，先生の居室に押しかけ検査を受けてもらうよう懇願したが説得は不調に終わった．やむを得ず病院長に経過を説明し，説得してもらうことにした．検査の結果，自宅静養となる．自宅で過ごす先生は，徐々に症状が進行し平成18年春に大学病院に入院した．

二見先生は昭和46年に九州大学を卒業すると同時に，九大から北里大学に赴任された山本真教授について相模原にこられた．二見先生は，学生時代は音楽に没頭し，中州界隈でアルバイトでピアノを演奏していたらしい．二見先生は山本教授より「手の外科」を担当するよう言われる．その時代の顔ぶれをみると，山本教授が二見先生を上肢担当に指名されたことは，適材適所の配置をされたと思う．これにより二見先生の生きる路が決定した．その後，順天堂大学の山内裕雄先生に師事することになり，週１回中古の外車を相模原から御茶ノ水まで走らせた．学生時代に中州という都会で過ごした先生にとって順天堂詣では非常に楽しかったらしい．山内先生の診療が終わると順天堂の先生方と連れ立って六本木などお江戸の夜を満喫した．一緒に飲むと，「あの頃が一番楽しかったし，よく勉強した時代だった」と何回も話されていた．昭和52年には30歳の若さで日手会の評議員になり，その後は学会理事，各種委員会の委員などを務めた．学術集会では頻繁に質問するため進行に支障が生じてはという危惧から，主催校の先生に学会前夜にしこたま飲まされてつぶされたというエピソードをも聞き及んでいる．二見先生は明るく，物事にあまり動じないおおらかな性格の人だった．一方，後輩の指導面では厳しさがあったが，温かな心で見守っていてくれた．そのため，若い先生からは「フーさん」と呼ばれ慕われた．平成12年には副院長に就任され，その多忙さから患者さんと接する時間が少なくなるにつれ，「本当はもっと臨床をやりたいのだが」と嘆かれていた．こよなくジャズを愛した先生は，手術室内でも，「何か音楽が流れませんかネー」と言って，必ずジャズをリクエストした．平成17年10月に執刀した陳旧性屈筋腱損傷例が最後の手術となった．

二見先生は下関での評議員会で平成20年度の会長に推挙されていた．筑波大学の落合直之教授との選挙となったが，多くの評議員の先生方から支持をいただいた．先生は学会終了後，直ちに学会開催地に決めていた福岡に行き，会場を予約した．しかし，二見先生による学会開催が不可能となったため，当時の中村蓼吾理事長を初めとする諸先生方のご理解とご尽力により，落合教授に学会長をお引け受けいただくことになった．二見先生も安心されたと思う．振り返ると，あの選挙は何かの因縁だったのであろうかと不思議に思えてくる．

発症直後に「３ヵ月しかもたない」と人の心を逆なでするような暴言を吐いた某教授の思惑もはずれ，二見先生は２年半にわたり頑張られた．小生が最後に会った今年の３月には，時々熱発することはあっても状態は落ち着いていたが，平成20年５月20日永眠された．享年61歳．黄土では恩師の山本先生と会い，おそらくこう言われていることだろう．「二見さん，あんたこっちに来るの早すぎた」．‘人間，出会いは絶景’と言われるが，二見先生は恩師山本先生，山内先生を始め，他大学の多数の先生方や後輩と出会い，それはまさに絶景であったに違いない．多数の人々から慕われた二見先生，お疲れさま．いろいろと教えていただきありがとうございました．合掌．

故二見俊郎先生

第8回日本手の外科学会・香港手の外科学会 Exchanged traveling Fellow報告記

奈良県立医科大学整形外科
重　松　浩　司

この度，第8回の日本手の外科学会・香港手の外科学会Exchanged traveling Fellowに選出していただき，2月10日から23までの約2週間にわたり香港を訪問させていただきました．例年は香港手の外科学会開催期間中に訪問する事になっておりますが，今回の訪問期間には第7回のAPFSSHがDr. WY IP会長のもと開催されました．多くの日本人の先生方が参加されたため，非常ににぎやかな香港訪問となりました．またAPFSSHの併設学会としてpre-congress，post-congressにも参加できたため，3つの学会に参加し発表の機会を与えていただき，非常に有意義な時間を過ごすことが出来ました．

今回の訪問ではまずDr. PC Hoが主催されました2008 Hong Kong International Wrist Arthroscopy Workshopに参加しました．日本からも演者としまして慶應大学の中村俊康先生，済生会下関総合病院の安部幸雄先生も参加されており，また同門の面川庄平先生をはじめ数名の日本人も受講されていたため，不慣れな海外旅行の出だしとして大変心強い思いでした．Workshopではfresh frozen cadaverを用いて基本的なTechniqueから鏡視下の舟状骨偽関節手術やTFCC損傷にたいするAdams法の鏡視下変法などかなりmaniacな手術までご教授いただきました．

APFSSHではJSSH-HKSSH Exchanged Traveling Fellowship Ambassadorとして講演の機会をいただき，奈良医大におけるKienbock病の治療成績と私の基礎研究である骨髄間葉系幹細胞を用いた新しい腱球移植術について，緊張の中たどたどしい英語で恥ずかしながら発表をさせていただきました．Post-congressは場所を移動して中国本土のShenzhenで発表をさせていただきました．しかし，この学会は中国本土と言うこともあり，私とDr. Steven F. Viegas以外の発表はすべて中国語であり，残念ながら内容を聞き取ることは出来ませんでした．これにはDr. Viegasも閉口されていたようです（笑）．

また，この短期間に様々な施設を見学させていただきました．Prince of Wales HospitalではDr. PC Hoと有意義なdiscussionをすることができましたし，Pamela Youde Nethersole Eastern HospitalではDr. FreelandのLive surgeryも見学することが出来ました．また，Chinese University of Hong Kongでは実際に18歳の舟状骨骨折偽関節の手術を見学しpitfallも教えていただきましたので，是非日本でも機会あればchallengeしてみたいと思います．

今回の香港訪問では非常に多くの香港手の外科のメンバーの方々のお世話になりました．昨年の香港手の外科学会会長のDr. CH Yenは今回の旅程のCoordinateに始まり，公私ともども大変お世話になりました．ひとつ年上ということもあり頼れる兄のような存在でした．また，Dr. PT ChanやDr. Choi KY，Dr. HK Wong，Dr. Zhuang Yなど本当に多くの先生方とも知り合えたことは私の貴重な財産です．またChang Gun Memorial HospitalのDr. CH Linとは是非次回のWSRMで会いましょうと約束しており，次回の訪日が楽しみです．

Photo 1：7th APFSSHにて．Dr WY IpよりJSSH-HKSSH traveling fellow[としてメモリアルをいただきました．

さて，今後のtraveling fellowの方に一つだけ注意点を！　訪問前に日程調整が必要となるため頻回にメールでのやり取りをしますが，現時点では

香港，台湾からのメールはサーバーによってはウィルスメール扱いをされてしまうため，メールが読めないことがあります．セキュリティーレベルを少し下げる必要がありますのでご注意ください（恐ろしい話ですが…）

最後になりましたが，今回のFellow選出に際し，ご推薦していただきました奈良県立医科大学整形外科　高倉義典教授，矢島弘嗣助教授，選出していただきました中村蓼吾理事長，国際委員会の方々，2週間という長い期間の不在を快く許してくださいました櫻井悟良整形外科部長をはじめとするスタッフの方々，そして産後5日目のとんでもない時期の出発を快く送り出してくれた妻と家族に心より御礼申し上げます．

Photo 2：Post Congressの[Shenzhen one day tourで Xiaomeisha Beach[にて．Dr. Lin,　Dr. Viegasらと．

Photo 3：大変お世話になった[Dr. Yenと．Hot Pot Partyにて．

ハンドギャラリー(児島コレクション)IX
芸術作品としての手　その4

埼玉成恵会病院・埼玉手の外科研究所
児　島　忠　雄

今回はポスターを紹介します．

一つはパリのピカソ美術館のポスターです（写真左）．ピカソの右手の石膏像の写真が画面一杯に拡がっており，開館の曜日，時間が記されています．近位・遠位・母指球皮線が深く刻まれ，手相で運命線と呼ばれる正中皮線が中指基部まで達しており，ふっくらとした指腹とともに，力強い意思を示す手の表情です．自分の手をモデルとした石膏像と思われます．ピカソは手をモチーフとした多くの作品を描いており，有名なゲルニカにも幾つかの手が描かれています．

もう一つはサヴィニヤックの“高速道路はだめ”（1972）のポスターです（写真右）．セーヌ河畔の高速道路の建設に対し，ノートルダム寺院の二つの塔が両手になって反対を訴えています．彼は「ヴィジュアル・スキャンダル」と呼ばれる作風の現代フランスのポスター画家の第一人者でした．フランス人特有のエスプリを効かせたユウモアによって広告媒体であるポスターに生命力を吹き込んだといわれています．もう1点の“Pont de Normandie開通記念（1995.1.22）”も展示されています．二つの手が橋となって中央で握り合わされ，母指の間でオレンジをはさみ持っている明るいほほ笑ましいポスターです．思わず開通記念に行きたくなるようです．

（「暮らしの手帖社」で撮影された写真をご好意でお借りしました．）

日本手の外科学会の新たな方向を目指して

日本手の外科学会理事会では，今後，日本手の外科学会がどういう方向に進んでいくべきかという議論の中より，学会の社会的認知，地位の向上を図る一つの方向として，日手会の法人化に向けての検討を始めました．一昨年発足いたしました専門医制度が，一般に広告できる制度となるためには法人化は不可欠と考えております．そのため，法人化検討委員会を設け，法人化の是非および法人化のロードマップなどについて検討を行っていくことといたしました．会員諸兄姉には，日手会誌，日手会ニュース，ホームページなどを通じ，お知らせをし，広くご意見を承ってまいりたいと存じます．

どうか，ご協力くださいますようお願い申し上げます．

日本手の外科学会
理事長　三　浪　明　男

〈〈〈〈専門医制度に関するお知らせ〉〉〉〉

本年をもって，専門医特例申請が終了します．新たに来年度からは専門医になるための試験が始まります．

1. 専門医特例申請について

平成20年10月１日から31日までが，申請期間です．今回が最終ですので，期日に遅れないようご注意ください．申請書類は，８月中旬に日手会ホームページに掲載いたします．

2. 第１回専門医試験について

平成21年４月18日(土)，第52回学術集会の翌日に，学術集会と同じ京王プラザホテルで行われます．

試験開始時刻は午前８時30分，試験終了は午後２時頃を予定しています．試験の形式は，筆答試験（60問）と口答試験（申請手術症例および試験委員会作成の症例問題）です．筆答試験の主な出題範囲は Green's Operative Hand Surgery,（5th ed., Churchill Livingstone）を参考にしています．筆答試験の形式は医師国家試験に準じた多肢選択問題で，口答試験では試験官との面接を行います．

試験のための申請期間は，12月１日～15日です．申請書類は９月中旬までに，日手会ホームページに掲載いたします．今回，受験できる方は，日整会または日形会の専門医で，５年以上継続して日手会の会員であることなどいくつかの条件があります．詳しくはホームページに掲載されています「専門医制度規則」や「FAQ」を参照してください．

なお，必要な研修実績の中で，「最近５年間に３回以上，日本手の外科学会学術集会に参加していることを要する.」とありますが，これは制度が発足した第49回学術集会以降が対象となります．従って，今回受験できる方は，第49回，第50回，第51回と連続して学術集会に参加している方となります．また，教育研修講演の受講が必須です．この先も，日手会秋期教育研修会（３単位取得可能）などがありますので，ホームページをご参照ください．

会　告

平成20年8月1日

平成20年度　日本手の外科学会
理事長　　三　浪　明　男

日本手の外科学会認定手の外科専門医審査申請について

日本手の外科学会認定手の外科専門医制度規則第6条，第7条により，手の外科専門医審査申請を下記の通り受け付けます．

記

平成20年度日本手の外科学会認定手の外科専門医試験

期　　日：平成21年(2009年)4月18日(土)

会　　場：京王プラザホテル
〒160-8330 東京都新宿区西新宿2-2-1　Tel. 03-3344-0111

方　　式：筆答試験および口答試験

申請資格：次の各号に定めるすべての資格条件を具えているもの．

1）日本整形外科学会あるいは日本形成外科学会専門医であること
2）申請時において5年以上引き続き本会の正会員であること
3）通算5年以上の手の外科に関する研修期間を有し，そのうち日本手の外科学会認定研修施設（以下「研修施設」という）で通算1年以上の研修期間を有すること
4）別に定める手術経験を有すること
5）別に定める手の外科学に関する研修実績（学会参加，教育研修会参加，セミナー参加）および一定の業績（学会発表，論文発表）を有すること

詳細については，専門医制度規則および専門医制度に関するFAQ（日手会ホームページに掲載）を参照してください．

申請方法：①所定の書類審査料（30,000円）を納入してください．
愛知銀行　八事（やごと）支店　　普通預金　700062
口座名：日本手の外科学会専門医制度特別会計
※必ず個人名でお振込みください．個人名以外の振込みの場合，審査期間内に確認ができず，審査が受けられない場合があります．
②所定の書類（下記参照）に必要事項を記入し，事務局宛送付してください．
送付先（事務局）〒468-0063　名古屋市天白区音聞山1013
有限会社ヒズ・ブレイン内
日本手の外科学会事務局専門医試験係

申請期間：平成20年12月1日(月)～15日(月)【事務局必着】

提出書類：署名欄を除き，すべてワープロで印字してください．
なお書式は日手会ホームページよりダウンロードできます（平成20年9月予定）．

1. 認定申請書（様式1）
2. 研修履歴書（様式2），研修証明書（様式2-1）
3. 手術記録　症例一覧表（様式3-1），
申請手術症例総表（様式3-2），
申請手術例病歴要約（様式3-3）
4. 業績目録および学会参加記録総表（様式4）
5. 教育研修記録（様式5）
6. 1～5までのコピー1部
7. 書類審査料振込金受領書のコピー

書類審査結果：書類審査の結果は，平成21年2月中に申請者に通知します．

受験料の納付：書類審査合格者は，平成21年3月15日までに受験料(50,000円)を納付してください．

日本手の外科学会　第14回秋期教育研修会のご案内

まだ若干の余裕がありますので，氏名・連絡先住所・連絡先電話番号／ファックス番号・メールアドレス・勤務先・卒業年度をご記入の上，下記宛お申し込みください，

会　　期：平成20年9月6日(土)・7日(日)
会　　場：名古屋国際会議場　〒456-0036 名古屋市熱田区熱田西町1-1
企　　画：日本手の外科学会教育研修委員会
共　　催：エーザイ株式会社
協　　力：第19回日本末梢神経学会
受 講 料：20,000円（テキスト代，2日目の昼食代を含む）
※日手会（3単位）・日整会教育研修単位受講料は別途
申 込 先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013　㈲ヒズ・ブレイン内
日本手の外科学会事務局「日手会第14回秋期研修会事務局」宛
TEL 052-836-3511 / FAX 052-836-3510

編集後記

本文に掲載されましたように，特例措置による専門医申請が本年度で終了し，第1回手の外科専門医試験が来年4月，第52回日本手の外科学会学術集会の翌日に東京で行われます，本学術集会のテーマは「専門医制度の確率-更なる技術の取得に向けて」に決まり，専門医制度に関するシンポジウムや「専門医特別講座」などを予定しております，より有意義な学術集会になるよう，堀内行雄会長を中心に，学会準備委員会は知恵を絞って準備を進めております，秋の演題募集ならびに学術集会へのご参加をお待ちしております，よろしくお願い申し上げます，

（文責：佐藤和毅）

広報委員会
（担当理事：田中寿一　アドバイザー：堀内行雄　　委員長：副島　修　　委員：今谷潤也，小野浩史，佐藤和毅，白井久也，藤岡宏幸）